
歪む社会

歴史修正主義の台頭と虚妄の愛国に抗う

安田浩一
倉橋耕平

論創社

他人から学んだだけにすぎない真理は、我々に付着しているだけで、義手義足、入歯や蠟ろうの鼻か、あるいはせいぜい他の肉を利用して整形鼻術がつくった鼻のようなものにすぎないが、自分で考えた結果獲得した真理は生きた手足のようなもので、それだけが真に我々のものなのである。

(シヨウペンハウエル『読書について 他二篇』斉藤忍随訳、岩波文庫より)

はじめに 倉橋耕平

「対談」とはどのような「知」の使い方だろうか。

西洋哲学の方法論の基本は、「論証」「概念分析」「対話」である。そのうち、「対話」とは互いが持つ知識や考え方を付きあわせて、一般的な信念や常識を疑ってみること、そしてこのことは、議論の高みを目指すための知性の使い方であると言える。おそらく、今回の対談はまさに「対話」というかたちが実現されたものであったように思う。

本書は、ジャーナリストの安田浩一さんと倉橋が、現代日本の「右派現象」をめぐる、お互いの視角から検証することを目的として、時間を共有した記録である。二〇一八年に私は『歴史修正主義とサブカルチャー』（青弓社）を、安田さんは『「右翼」の戦後史』（講談社現代新書）を上梓した。幸せなことに両著作とも多くの人の手にとってもらえた。

拙著では、一九九〇年代以降に右派論壇で展開される歴史修正主義が、（歴史学を扱う学術出版ではなく）商業出版、サブカルチャー、メディア文化を通して拡散したことを検討した。

他方、安田さんの著作は、足を使って右翼の生き証人への取材を元に、右翼の歩みを検討したものだ。た。

そうした、本を書くための検討方法が異なる二人が、それぞれ研究者とジャーナリストという立場から現代社会における右派について対話したときに見えてくるものは何か、というのがこの本の趣旨である。森友・加計学園問題と財務省の公文書改ざん、憲法改正論議、ネット右翼、ヘイトスピーチ、そして沖縄知事選のデマなど、現代右派の横暴はとどまるどころを知らない。

本書の対談のなかにあるように、いわゆる「ネット右翼」と呼ばれる人たちの数は読者のみなさんが思っているほど多くない（第二章参照）。しかし、社会状況を見れば、政治家が歴史修正主義的な発言をし、マイノリティへのバッシングを繰り返している。また、書店に行けば、根拠の怪しい嫌韓本や嫌中本などがベストセラーとなっており、現代右派の言説に触れる機会はむしろ増しているのではないだろうか。すなわち、メディア産業といまの右派言説の状況はリンクしているのだ。

こうしたアクチュアルな対象を、現場からの観察と文化研究の観察によって解きあかしていることとするのが、本書の特徴でもある。それは、対話形式の著作が持つ「速度」の強みのひとつだ。

安田さんとの対談のなかで印象深かったのは、「現在の右派の特徴は言葉が軽い」という認識を共有したことである（二八〇ページを参照）。体制に対する批判のために扱われる「ヘイト」「差別」「特権」という言葉が、翻って抑圧者であるマジョリティ側に篡奪さんだつされてしまっている状況がある。

「日本人ヘイト」「日本人差別」「男性差別」「在日特権」などの言葉がネットに溢れている。

あるいは、天皇を「左翼」だと言ってみたり、保守を「メンテナンス」だと説明してみたり、文脈を断絶した言葉の使用事例は枚挙にいとまがない。もちろん、これらは意味レベルで言語の使い方を誤っている。しかしそれ以上に、なぜマジヨリテイが被害者として自分を位置づけられるのか。ここに、マジヨリテイとマイノリティをめぐる歴史文脈が共有されていないという、歴史軽視の志向があらわれているように思われてならない。マジヨリテイが被害者に見えてしまうような論理や認識は、やはり「歴史の否定」に基づくのではないか。

差別には必ず「歴史性」が伴う。しかし、歴史を無視して関係性を平等・フラットに見たときに、少しでも自分のほうが虐げられているように思えば、マジヨリテイであろうがなんだろうが「差別」だということになるのだろう。だが、それは不誠実なものの捉え方にほかならず、いわゆる「現代的レイシズム」である。そして、自身を正当化し、他者を攻撃するために都合のよい言葉を探し、使う。だから「言葉が軽い」のだ、と私は思う。

しかし、大事なことは、現状を批判的に捉えるだけにとどまらず、なぜこのような事態に至ったのかという視点である。そのために必要なことは、他者を退けるものではなく、他者を知ろうとするための知性の使い方である。言葉はそのためにあるし、安田さんと私はそうした関心を持ちつづけ、取材・調査・著作活動に向きあっている。

この対談もそうだ。対話のなかで言葉をつくして他者を知ろうとすることこそ、いま必要なことではないだろうか。なぜなら、私たちはいま、インターネットのアルゴリズムによって知りたいことだけを知り、見たいものだけを見ることのできる環境にあるからだ。その環境は社会を「分断」し、知性を閉じていく。言葉と知性は、その先の大海に面しているにも

かわらぬ。

本書の対談は、二〇一八年の七月から九月にわたって、三回おこなわれた。安田さんと共有した時間はスリリングで、私にとってかけがえのないものになった。一回目と二回目の対談のあいだにTBSラジオ「荻上チキ・session.21」で共演したことも思い出深い。安田さんはいつも熱く、問題意識がほとばしっていて、毅然とした姿勢で差別や人権問題に斬りこんでいく。豊富な知識と行動力を持つジャーナリストの姿を間近で見せていただいて、とても勉強になった。

本書で私たちが話したことが、現代日本の右派と政治・社会状況をめぐる理解への一助となればうれしい。また、私自身もまだ「仮説」段階の見解を思いきって口に出している。自分の研究領野の話をして恐縮だが、本書で話題としたような右派イデオロギーとメディア文化の研究はいまだ少ない。そうした「仮説」から先に向かって研究や調査を進めようと思う人がいたなら、なおうれしい。ただし、本書における「仮説」などの不備の責任は私にある。読者の忌憚なき批判を待ちたい。

知識も経験も未熟な私をこの企画に誘ってくださった編集者の谷川茂さん、本を出してくださった論創社の森下紀夫社長、谷川さんと私をつないでくださった本田由紀さん（東京大学）、矢野未知生さん（青弓社）、そしてなにより安田浩一さん、ありがとうございました。

（二〇一八年二月三一日）

目次

第一章 ネット右翼は思想か？ それともファッションか？

- 「余命三年時事日記」による弁護士懲戒請求とは何だったのか……………12
ネット右翼とオンライン排外主義……………16 隊服からスーツへ……………20
極右とネット右翼の違いとは……………25 在特会とセックスピストルス……………30

第二章 時代によって変化する保守言説

- 保守とは何か……………36 内輪話の保守言説を表舞台に出した小林よしのり……………38
時代によって変化する保守言説の「最先端」……………42 右翼の言葉が移ろっていく……………45
棚上げされていた歴史認識問題が焦点化する……………49 日本社会は右傾化しているのか……………53

第三章 歴史認識、ヘイトスピーチ、そして差別

- 九〇年代の「慰安婦」問題……………60 一丁系とネット右翼の関係性……………63
自分で選び、自分で発信したものは「正しい」のか……………66
歴史修正主義の本を書いた理由……………70 取材しなくてネット右翼を取材したことはない……………72
ヘイトスピーチの被害者への気づきが遅れた理由……………76 沈黙を強いることの罪……………79
物言う弱者に対する排除や差別……………82

国会議員によるバックラッシュが始まる

- 国会議員によるヘイト発言…………… 90
 あぶり出されるマイノリティ…………… 92
 「杉田さんは素晴らしい！」…………… 97
 自民党はなぜヘイト発言を容認するのか…………… 99
 二〇〇〇年代とバックラッシュ…………… 103
 「慰安婦」問題はむずかしい…………… 107
 右派の分析に重要な年としての一九九七年…………… 110
 酒場左翼とは…………… 113

歴史修正主義とメディアの共存

- 朝日新聞を叩くことの意味…………… 118
 保守系総合誌の変容…………… 121
 マルコポーロ事件の衝撃…………… 122
 「つくる会」を甘く見ていた雑誌記者たち…………… 125
 歴史修正主義のテンプレート…………… 129
 自己責任と排除…………… 134
 リンクするネット右翼と新自由主義…………… 136

リベラルはなぜ右派に対抗できてこなかったのか

- 歴史修正主義の事例研究…………… 142
 逆張り気持ちはいい!?…………… 144
 本質がスポイルされていく…………… 148
 教育が攻撃される時代…………… 150
 日教組はいまも活動しているのか?…………… 153
 「つくる会」を冷笑する態度は学者としてどうなのか…………… 155
 九〇年代サブカルチャーとポストモダン…………… 158
 ムック、オカルト、そして政治へ…………… 162
 右派の粗製濫造に左派がついていけない…………… 166
 不買運動はありなのか…………… 168

第七章 差別はネットとともに進化する

- 保守、右翼、ネット右翼…… 174 「雑なネットウヨ」とは…… 177 ネットの変質について…… 181
「新たな真実」とネットで出会う…… 184 フィルターバブルとネット右翼…… 187

173

第八章 企業のネット右翼化を考える

- 歴史修正主義と排外主義のつながり…… 194 ネット右翼的な企業について…… 197
拡張する「ネットウヨビジネス」…… 201 ネット右翼的な出版社について…… 203
「良書を出しているからヘイト本を出してもいい」の論理…… 208
情報が欠乏した部分に入りこむ「気づき」と「発見」…… 211

193

第九章 リベラルは右派にどう抗っていけばよいのか

- 歴史修正主義と日本の政治…… 220 右派のエポックとしての一九九七年…… 222
自民党のメディア戦略とネット右翼…… 225
リベラル派与党議員の「いまは官邸に抗えない」という声…… 230
「そこまで言って委員会」を考える…… 233 「本音トーク」と「ぶっちゃけ」の危うさ…… 236
歴史を否定する人びとにどう抗っていくか…… 239

219

おわりに 安田浩一

246

文中の敬称は省略しました。 — 編集部

第一章

ネット右翼は思想か？ それともファッションか？

倉橋 本書の課題は、いまの日本で絶えることのない歴史修正主義や排外主義の言説とその背景にあるものを、安田さんと僕とで検討することです。その前提として、本章ではそうした言説を信じ、拡散する「ネット右翼」^{★1}とはどんな人たちなのかを見てみようと思います。

二〇一八年のネット右翼の話ですと、ブログ「余命三年時事日記」^{★2}（以下、「余命ブログ」）がひどかった。「余命ブログ」が特定の弁護士の懲戒請求を呼びかけた結果、四〇〇〇人近い人びとがそれに賛同しました。懲戒請求の理由は、東京弁護士会の弁護士が「朝鮮人学校補助金支給要求声明に賛同し、その活動を推進」したというものでした。

ところが、たとえば懲戒請求を受けた佐々木亮^{★3}弁護士は、東京弁護士会の朝鮮学校への補助金支給をめぐる国の対応を批判する会長声明には関わっておらず、労働問題が専門でした。そうしたこともよく調べずに大量の懲戒請求が送られてしまった。

一八年六月には、当該弁護士が懲戒請求を送った人びとに対して、裁判で損害賠償を請求しています。とはいえ、あまりにも人数が多く、訴訟のための費用も膨大となるため、弁護士側の負担は計りしれません。

「余命ブログ」は、おもに「日本再生」のためには「反日」とか「左翼」と呼ばれる人びとを排除すべきだと主張しています。同時に、いわゆるネット用語であり、デマゴーグでもある「在日特権」を盾にして、在日朝鮮人に対する嫌悪を書きちらしていま

★1…ネット右翼 本書では「ネット右翼」と「ネトウヨ」を同義として扱い、文脈によって使いわける。

★2…余命三年時事日記 余命プロジェクトチームで運営されているブログ。内容は朝鮮人に対する排外的なもの。同ブログを端緒に二〇一八年に「弁護士大量懲戒事件」が起こった。

★3…佐々木亮 (Tofu) 北海道出身。弁護士。日本労働弁護団常任幹事。ブラック企業被害対策弁護団代表。

★4…青林堂 一九六二年創業の出版社。名編集者の長井勝一が創業し、六四年には白土三平とともに『月刊漫画ガロ』を創刊。「ガロ系」と呼ばれる漫画家を数多く輩出するなど、日本の漫画文化の成長に貢献した。

す。さらに、朝鮮学校への補助支給をめぐる国の対応を批判する弁護士や朝日新聞（以下、朝日）への反対活動の拠点としても機能しています。

「余命ブログ」を読んでみた感想としては、第一に書かれている内容の根拠が薄いこと、第二にネット上の情報の転載が多く、どう読みこんでよいのかわかりにくい体裁を採っていること、最後になぜ質の低い情報を読んで、煽られて、自分にとって不利益になる懲戒請求などしてしまう読者がいるのか、という三点が非常に気になりました。

「在日」などのキーワードを見ただけで、反射的に懲戒請求へと動いている人がいるように思えたりもします。

安田 これはネット上における「行きすぎた事件」ではありません。完全な差別事件です。外国人差別を背景に敵と見なした弁護士を攻撃しているだけです。

弁護士への懲戒請求を扇動しているブログ記事は、老舗の出版社・青林堂から一五年に『余命三年時事日記』という書名で書籍化されています。青林堂は白土三平の「カムイ伝」や「月刊漫画ガロ」の版元として知られていましたが、経営不振で社員の退社があいつぎ、一九九九年に現社長の蟹江幹彦が経営を引きついで以来、「右旋回」したと言われています。

とくに二〇〇〇年代に入ってから、元在特会の桜井誠による著書をはじめ、差別扇動を目的とするような書籍を発行しています。ちなみに同社の編集者の一人は、後述のとおり在特会の元広報担当者でもあります。

たとえば今回、懲戒請求されたうちの一人である佐々木弁護士は、朝鮮学校の補助金

その後、数度にわたる経営者の交代を経て、二〇一一年からは「ジャパニズム」の創刊をはじめ、保守系の出版物を刊行するようになった。

★5：カムイ伝 忍者カムイを主人公にした物語で、白土三平の漫画。江戸時代の反権力や差別をテーマにした作品で、「月刊漫画ガロ」を創刊から支えた連載であった。

★6：月刊漫画ガロ 一九六四年に長井勝一と白土三平が創刊した伝説の漫画雑誌。二〇〇二年休刊。一九九七年、青林堂の編集者らが青林工藝舎を設立し翌年に「ガロ」を継承するかたちで「アックス」を創刊した。

問題には、まったく関わっていません。しかし、青林堂で発生した労働争議^{★7}では、労働者側の弁護士を務めています。そのため、同社を支持するネット右翼層からは常にネット上で攻撃の対象となっていました。今回の懲戒請求も、朝鮮学校うんぬんではなく、同社の労働争議に関わっていたという文脈でおこなわれた可能性が高い。

また、佐々木弁護士と同じく約九五〇人から懲戒請求された金竜介^{★10}弁護士も、やはり朝鮮学校の補助金問題とは無関係です。僕が金弁護士に話を聞いたときには、「姓が一字の弁護士も狙い撃ちにされたのではないか」と述べていました。実際、朝鮮学校が関連する訴訟には関わっていないのに、在日コリアンだとわかるような姓を持つ弁護士が八人も懲戒請求されています。東京弁護士会は「確信的犯罪行為」だと声明を発表しましたが、そのとおりでしょう。もちろん朝鮮学校に関わっていたからとしても、何も問題となるはずがない。繰り返しますが、差別事件であり、嫌がらせです。

「余命ブログ」の言う「告発状」、すなわち懲戒請求を送るまでのからくりは、こうなっているようです。まず、「余命ブログ」が告発状のPDFファイルをネット上で配布し、賛同した人は署名・捺印したうえで指定の送り先に発送。送り先には告発状を取りまとめている人がいて、その人は一定数の告発状がまとまったら弁護士会へ発送する。倉橋 告発状を受けとって、弁護士会へ送付する作業を、同ブログからお金をもらって請けおっている人がいるようです。また、「余命ブログ」は寄付金も集めていますし、書籍による収入もあります。

安田 目的が明確ではないし、稚拙さばかりが目立つ。だが、妙にシステマチックです。

★7…鯉江幹彦（1968）『愛知県出身。ミニコミ誌「早稲田乞食」編集長、フリーライター、CD-ROM制作会社などを経て、一九九九年から青林堂社長。』

★8…桜井誠（1972）『福岡県出身。政治活動家。日本第一党党首。元在特会会長。著書に『大嫌韓時代』『日本第一党宣言』（以上、青林堂）など。』

★9…青林堂の労働争議 二〇一四年に、入社した社員を青林堂が解雇したが、東京都労働委員会が地位保全と賃金支払いの仮処分を認め、復職した。しかし、同社員は復職後、経営陣からのパワハラを受け、適応障害となって休職に追いこまれた。その後、損害賠償と未払い給与の支払いを求めて東京地裁に提訴した。

倉橋 運営について言えば、同ブログでは運営しているのは三代目とっています。

安田 定かではありませんが、人物はほぼ特定できています。七〇代の男性です。警察や弁護士とのやりとりを見ていると、素人ではないと思われます。「こう訴えられたら、こう切りかえす」という段取りがよくできています。引くべきところも押すべきところも知っている。公安とのやりとりも含めて。もちろん、ブログをやって、デモなどに出ているだけの人かもしれない。けれど、何かビジネスの匂いが漂う。

倉橋 個人ではなく、「余命プロジェクトチーム」という組織で運営していますね。

安田 組織で運営している可能性は高いと思います。

倉橋 三代目とっていますますが、運営は一人でない。安田さんが述べたとおり、ブログは書籍化されていて、本の奥付では「余命プロジェクトチーム」が著者になっています。書籍版では「余命プロジェクトの前身は2011年、学生主体の日本人覚醒プロジェクトにはじまる。途中から初代余命が加わり、没後2014年からは既出記事の拡散と遺稿記事の投稿を余命プロジェクトとして引き継いできた」とあります（前掲書、「はじめに」）。

ちやうど大量懲戒請求事件が話題になる直前に『マンガ嫌韓流』の作者・山野車輪の絵で『余命三年時事漫画』（青林堂）という『余命三年時事日記』の続編が発売されています。こちらは、「フィクション」と断られたうえで描かれています。内容は『マンガ嫌韓流』と変わりません。

また、『余命三年時事漫画』はベストセラーになっていました。同書を読んで、「余命ブログ」のほうに移行した人たちが、かなりいるはず。騙されやすいのは、そういう

★10：金龍介（1989） 東京都出身。弁護士。在日コリアン弁護士協会理事。

う人たちでしょう。

余命プログラムの件で訴えている佐々木弁護士が、署名した人の年齢層を「Twitter」で公開していましたが、もつとも若い人で四三歳だったそうです。つまり、あまり若くない。四〇代、五〇代がボリュームゾーンだという話です（その後のNHKの取材では、平均年齢が五五歳でした）。

安田 僕もそのように聞きました。署名をしたのは四〇代から八〇代だった。この年齢層が「余命プログラム」のシンパであり、いわばネット右翼であるという現状は、何を物語っているのでしょうか。

ネット右翼とオンライン排外主義

倉橋 これから紹介するのは東京での調査結果です。

二〇一八年六月三〇日、樋口直人^{★11}、永吉希久子^{★12}、松谷満^{★13}、山口智美^{★14}とともに、東京でのシンポジウム「ネット右翼とは何か」^{★15}に僕は登壇しました。とりわけ、永吉の「ネット右翼とは誰か」という調査報告が非常に興味深かった。同調査は、二〇一七年一二月に二〇〇七九歳の東京都市圏に住む七万人を超える人びとをウェブモニターとして調査したものです。

この調査は、ネット右翼と言われている人とオンラインで排外主義的^{★16}な主張を繰り返しかえす人びとを分析しているのですが、結論を先に言えば、ネット右翼の多く人はオンラ

★11…樋口直人（1969） 神奈川県出身。社会学者。徳島大学大学院准教授。徳島労働局参与も務める。著書に『日本型排外主義』（名古屋大学出版会）など。

★12…永吉希久子 大阪府出身。社会学者。東北大学大学院准教授。著書に『行動科学の統計学』（共立出版）など。

★13…松谷満 福島県出身。社会学者。中京大学准教授。共著に『終わらない被災の時間』（石風社）など。

★14…山口智美（1961） 東京都出身。文化人類学者。モンタナ州立大学社会学・人類学部准教授。専門は文化人類学、フェミニズム、日本研究、メディア研究、ジェンダー研究。共著に

おわりに 安田浩一

二〇一八年末、私は各地の外国人労働者集住地域を回っていた。その少し前に、外国人労働者の受け入れ拡大を狙いとする改正入管法が国会で成立したばかりだった。

政府は経済界の要望に応えるかたちで、新しい在留資格を設け、単純労働分野における“働き手不足”への対処をはかった。事実上、移民国家へと舵を切ったことになる。

この動きを、いま日本で働いている外国人がどのように受けとめているのか。それが取材の目的だった。

外国人労働者の支援組織が運営する岐阜県内の“シエルター”では、さまざまな事情で職場から逃げてきた一四名の技能実習生が生活していた。中国、ベトナム、カンボジア、フィリピンなどから来日した実習生たちは、口をそろえて訴えた。

「まずは私たちを人間として扱ってほしい」

カンボジア人の女性は、基本給が月額六万円、残業時給は三〇〇円だった。しかも預金通帳は会社に管理され、自由に引き出すこともできない。このままでは酷使されるだけで終わってしまうと危惧し、シエルターに逃げこんだ。

中国人の女性は一日に一五時間の労働を強いられていた。しかも休日は月に一度しか許されない。労働基準監督署が調査に入ったが、会社側が示した賃金台帳だけを信用し、女性の訴えには耳を貸さなかった。仕方なく、女性はシエルターに駆けこんだ。

愛知県では日系ブラジル人の労働者たちに話を聞いた。

日系三世の女性是一九九二年に来日し、流暢な日本語を話す。二〇年間、大手自動車メーカーの関連工場で働いてきた。同じ職場でこれだけ長きにわたって勤めていても、いまだ正社員になることができない。

あるとき、会社の上司に訴えた。「これは外国人に対する差別ではないのか」。

上司は何のためらいもなく、こう返した。

「ここは日本だから。我慢するしかないでしょう」

そう、ここは日本。そういう国なのだ。諦めることで今日を乗りきるしかない。でも——。彼女はため息まじりに漏らした。

「やっぱり納得がいけないんですよ。外国人であるというだけで、キャリアも能力も無視される。結局、私は労働者ではなく、単なる労働力としか見てもらえない。都合よく使われるだけ」

彼女の友人は、妊娠したことを告げただけで、派遣会社から契約を打ちきられた。別の友人は上司からのセクハラに抗議しただけで解雇された。

「日本人であればあり得ないことが、外国人のあいだでは当たり前のように起きています。差別だと訴えても、区別しただけだと返される。嫌なら国へ帰ればいいのだと諭される。ど

んなに長く住みつづけても、受けいれてもらえないのだなあと実感することが多い」

これが「おもてなし」の国の内実である。望まれているのは、永住を前提としない安価な労働力でしかない。生身の人間が日本社会の新たな構成員となることなど、政府も経済界も考えてはいない。そもそも労働力を増やすことに躍起となっても、政府は一貫して「移民」の存在を認めようとしないのだ。外国人労働者は単なる雇用の調整弁だ。

これまで取材現場で目にしてきたさまざまな風景がよみがえる。

私は九〇年代末から外国人労働者の取材を続けているが、浮かびあがってくる問題は何も変わらない。労働力を踏みたおす経営者がいて、人間としての存在を認められない外国人労働者がいて、そして、それを許容する政府と日本社会がある。従順にしていれば地域の祭りくらいには呼んでももらえるが、権利を主張すれば「治安」の観点から厄介者扱いされる。

「ここは日本だ」「日本が嫌ならば国へ帰れ」「外国人は権利を制限されても当然だ」——。こうした言葉がどれだけ多くの外国人にぶつけられたことだろう。ご都合主義の極みではないか。

それはそのまま、いま、日本をじわじわと侵食している排外主義の風景と重なる。

排除の対象にされるのは、ニューカマーの外国人労働者だけではない。同じ言葉を、いや、罵倒を、古くから日本で暮らす外国籍住民、海外にルーツを持つ人々は、さらに激しく浴びせられている。

今日もデマに基づいた差別と中傷が各所で飛びかう。

とくにひどいのがネット言論だ。

ネット上にあふれるデマ情報を鵜呑みにした者たちによって、ヘイトスピーチが生まれる。ネットは常識的な言葉よりも、常識を超えた物言いこそ客が付く媒体だ。より刺激的で、勢いがあり、さらに悪意に満ちた書きこみが、精査を受けることなく「拡散」される。

取材の過程で差別を生きがいとするような多くの「自称愛国者」と会ってきたが、彼ら彼女らの言葉から垣間見えるのは、「ネットで真実」ともいうべき「ヘイトの回路」である。

「在日（コリアン）は生活保護を優先的に受給できる」「在日は税金を払わない」「在日は通名と本名を使いわけて、犯罪歴を抹消できる」

このような「在日特権」なるヨタを真顔で私に訴える者たちは、根拠を問われると、かならず次のように答えるのだ。

「ネットにそう書いてある」

なかには、在日は水道光熱費を免除されているのだと本気で信じている者もいた。

こうした人々に共通するのは社会的階層でも属性でも年齢でもなく、あるいはネットを「使いこなす」スキルでもない。ネット情報だけを無条件に「信じる力」である。

二〇一八年の世相を一字であらわす毎年恒例の「今年の漢字」は「災」だった。数多くの災害の経験から全国的に防災意識が高まり、多くの人が自助、共助の大切さを再認識したことが選ばれた理由だというが、私には違った風景も見えてくる。

地震が起きるたびに、ネット上では「外国人が空き巣に向かっている」「外国人が井戸に毒を投げられた」といった書きこみが増える。関東大震災直後、朝鮮人虐殺の時代から、日本社会は変わっていない。水害に見舞われた地域では、ネットの書きこみを信じた者たちに

よって自警団結成の動きまでであった。災いは直接の被災者だけでなく、マイノリティにも向けられている。

さらに問題なのは、マイノリティへの差別と偏見を煽ることに、影響力のある政治家や著名人が加担しているといった点にあらう。

たとえば、自衛隊機が韓国軍からレーザー照射されたとされる事件で揺れた一九年初頭。ベストセラー作家の百田尚樹氏は「Twitter」に次のように書きこんだ。

へはつきり言います！韓国という国はクズです！もちろん国民も！

こうした剥きだしのヘイトが一部で絶賛されるのが、日本という国である。しかも、これほどの民族差別が書きこまれても、「Twitter Japan」は何の措置も取らない。ついでに言及すれば、こうした人物の書いた本をネット上でわざわざ宣伝しているのが、我が国の首相である。

本書のタイトルをもじれば、まさに「歪んだ」風景しか立ちあがってこない。

いったい、なぜ、こんな社会になってしまったのか。どうすればいいのか。そんな思いで、今回、倉橋耕平さんと顔を合わせた。

倉橋さんは「知」に満ちた人だ。優れた分析力と豊かな語彙を持っている。歴史の文脈に沿って、社会の問題点を指摘する力量はたいしたものだ。おまけに礼儀正しい好青年とくれば、私ごときが太刀打ちできるわけもない。実際、対談というよりも、私が聞き手に回るべきだと、会った瞬間から悟ることになった。

ふむふむと頷きながら、膝を手で打ち、そしてますます倉橋さんへの信頼を強めた。

だが、知性と人柄だけが倉橋さんの持ち味ではなかった。

倉橋さんは、自身の友人に向けられたヘイトスピーチが、この問題に関わるきっかけだと話した。そのとき、理知と快活で武装したようないつもの表情が、一瞬、曇った。苦痛と憤りの表情が垣間見えた。

おそらく、そうしたエピソードを抱えていようといまいと、倉橋さんは差別も排外主義も許さない、いまの倉橋さんであつたと思う。

だが、冷静さを保とうとしながら、それを抑制できずに感情の揺れを隠せなかった倉橋さんに、私はあまりに泥臭くて青い、彼の素顔を見たような気がした。

世間の空気に希釈されない倉橋さんの言葉の強みは、たぶん、そうした「情」をまとつているからなのだろうなあと思った。

私は、ますます彼が好きになった。

読者のみなさんも、そうした倉橋さんの一面をも知ることになったのではないか。

倉橋さんと話を重ねながら、私は自らの立ち位置を考えた。あなたはどをするのか——つねに問いかけられているような気持ちにもなった。

社会の「歪み」は、排除されようとしている人々の慟哭どうこくでもある。

だからいまは、どれだけ手垢の付いた言葉であつても、繰り返さずしかない。

これ以上、壊されてたまるか。社会も、地域も、そこで暮らす人々も。

憎悪の火を囲んで踊りつづける者たちに、私たちはきちんと示さなければならぬ。真つ当な怒りと、真つ当な情と、そして冷静な知識を抱えて。

私はそのことを倉橋さんに教えてもらったような気がする。

本書を上梓するにあたっては、編集者の谷川茂さん、版元である論創社のみなさんをはじめ、多くの関係者からお力添えをいただいた。深く感謝したい。

(二〇一九年一月五日)

安田浩一（やすだ・こういち）

1964年、静岡県生まれ。ジャーナリスト。雑誌記者を経て2001年よりフリーに。事件や労働問題などを中心に取材・執筆活動が続ける。『ネットと愛国』（講談社）で第34回講談社ノンフィクション賞受賞。「ルポ外国人『隷属』労働者」で第46回大宅壮一ノンフィクション賞（雑誌部門）を受賞。著書に『学校では教えてくれない差別と排除の話』（皓星社）、『「右翼」の戦後史』（講談社現代新書）など。

倉橋耕平（くらはし・こうへい）

1982年、愛知県生まれ。社会学者。関西大学大学院社会学研究科博士後期課程修了。博士（社会学）。立命館大学ほか非常勤講師。専攻は社会学・メディア文化論・ジェンダー論。2018年2月に『歴史修正主義とサブカルチャー』（青弓社）を刊行。共編著に『ジェンダーとセクシュアリティ』（昭和堂）、共著に『現代フェミニズムのエシックス』（青弓社）など。

歪む社会

— 歴史修正主義の台頭と虚妄の愛国に抗う —

2019年2月10日 初版第1刷発行

著者 安田浩一・倉橋耕平

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

電話 03 (3264) 5254 振替口座 00160-1-155266

カバーデザイン・イラスト 小林義郎

本文デザイン・組版 アジュール

印刷・製本 精文堂印刷株式会社

ISBN 978-4-8460-1791-0 C0036

© Koichi Yasuda, Kouhei Kurahashi, Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします